

6. 人間観

6-1-3. 身分・家系

私は、大正10年1月20日にフシココタン husko kotan で生まれた (71歳)。

旧姓も上野サダで婿とりだ。生まれた家も現在の敷地にあった。父親は、留吉といい。伏古生まれだ。3歳の時に父親が亡くなる。母親は、タケといい、幕別のヤムワクカ yam wakka 生まれだ。母親の父親は、鎌田という姓で上札内のひょうたん沢生まれだ。父方のまごじいさんには生まれる前に亡くなっていたので会っていない。

兄弟は、兄が二人いた。一人は3歳の時に亡くなり、一人は17歳の時に亡くなった。

幼い頃は、線路の向こうまで、今の鉄南の方までアイヌの人達の家があった。和人の家は何軒もなかった。

村長は、古川エカシ (タウゴロウ) という人だった。

[上野サダ氏]

大正9年、日高の静内の御料牧場に生れた。

父、淵瀬トクタロウの実家は新冠のハクツにあり、そこにまだ祖父母が生きていた。父は母と結婚すると十勝の新田牧場に牧夫として勤め、明治32、33年ごろ十勝にいた。その間、長男 (トクイチ) が川に溺れて死ぬという事故があった。次男 (トクジ) が生れたあと、御料牧場に転勤した。そこで、三男 (トクオ)、四男 (タケゾウ)、そして五男の私が生れた。私の兄弟は皆早くに亡くなった。四男タケゾウは、支那事変の負傷がもとで昭和15、6年に亡くなった。

淵瀬は父方の姓で、この先祖は300年前に今でいうフィリピンとかベトナムの方から日本にやってきたそうだ。そういう言伝えが残っていた。

子供のころ、御料牧場でキャベツの虫取りをしていると、15、6歳位の訓練生が近寄ってきて、「何をしているの」と聞かれた。その人の後から勲章をいっぱい下げた軍服に八の字髭をつけた軍人が「いた、いた」と言ってやってきた。訓練生のように見えたのは昭和天皇の弟、秩父の宮であった。宮様はトイレの窓から子供らを見て、何をしているかと興味をもったのだ。軍人は東条英機であった。

小学2年で学校をやめた (タカイの小学校)。

父は、大正14年、御料牧場を定年退職し、新冠の下ハクツに戻った。大正15年5月に亡くなった。そのあと、生活が苦しく、養子に出された。しかし、きかないので、養子先からさらに「守っ子」(もりっこ) にやられた。守っ子に行かされた先も3回ぐらい変った。(昔は呑気で養子といっても戸籍は変らなかった。20才で親の財産を引き受けた)。

9歳で叔父 (父の末の弟) の家に守っ子にやられたとき、叔母たちがエンバクを収穫している間、子守をしながら汁を作っておくように言われた。作り方が分からないのでいい加減に作

ったら、叔母に火の付いた薪をぶつけられた。叔母たちがまた畑に出たあと、赤ん坊を背負って山に逃げた。山でヤマベをとっていた。

赤ん坊を背負ったままヤマベ釣の糸を垂れていると熊の姿が横から目に入った。ちょうどヤマベがかかったが、魚の姿を見ると欲しがってかかってくると思ったので、黙っていた。やがてクマは撤退した。後から大きな石を投げると(私はそういう気性の人間である)、クマは向うからうなっていなくなった。

夜遅くなって叔父の家に戻ると、誰もいなかった。後で知ったが、みんな総出で捜索していたのだ。赤ん坊の世話をしているところに叔母が戻って来て、私たちを見てあつけにとられたようにポカンと口を開けた。赤ん坊は喜んで母に向かってはいはいして行った。叔母たちは、私の実母がいるアズマまで探しに行きたらしい。

アズマに父の兄弟の今蔵(いまぞう)という人がいた。妻を亡くしたので、母が後妻となって嫁いだ。今蔵はクマを72頭もとった人で御料牧場の牧夫だった。

最後にヌキベツの水口モンジロウという高知県からきた農家に奉公に出された。14歳から16歳の間奉公した。その農家では良く働いてかわいがられた。1月に3円の金がもらえたが、その金は父の末の弟が全部飲んでしまった。

16歳になって、営林署の植林の仕事に出た。冬の間は植林がないので水口の家を親の家として帰り、農家の手伝いした。主にこも作り(米俵作り)を手伝った。

また、兄弟恋しさに母が後妻に行った家にもときどき遊びに行き泊った。兄が戦争で受けた傷から亡くなったすぐ後に、義理の父(今蔵)も荒馬から落ちて腰の骨をおり、昭和16年に亡くなった。

実父も、義理の父(今蔵)も人にからむような飲んべではなかった。今蔵は、酒を飲んだら口論は絶対にするものではないと言っていた。18、9になって母と今蔵の家に遊びに行くとそういうことを言い聞かせてくれた。

戦争中、召集され樺太にいたが、戦後抑留されて、3年間、イルクーツクのサマルカというところにあった「ラーゲル」(収容所)にいた。ラーゲルには1000名の日本人がいた。抑留中は「単通」をした。単通というのは通訳のことである。沿海州のニシン場で働いていた年配の男が召集された仲間だった。その男は、かつてウルップのニシン場でロシア人と一緒に働いたことがありロシア語が少しできた。私のロシア語は初めその男から教わった。カクハワリツ kakhawarit 「これ、何だ」という文句を使い単語を増やしていった。

昭和21年の5月か6月、ロスケ(ロシア人)がどこからか没収してきた米を粳がらごと石臼で粉にしていた。それでは黒パンにしかならないので、御飯として食べられるように、精米用の臼を作る人が募られた。私を作ることになった。

粘土と煉瓦を砕いた粉に塩をまぜ、かまどで焼いた。それを塩水に入れて再び木槌でこねた。樽を作る要領で臼の木杵を作り、その中にこねたものを入れた。柱目の木の板を徹底的に乾燥させ、二枚一組にきっちりと張合わせ、それをこねたものに埋め「歯」とした。1週間ほお

ておくと乾燥し、臼ができあがった。

1000kgの粳を引くと500kgの米が取れた。その半分をロスケの倉庫に納め、残り半分を炊事場の地下室（むろ）にしまった。

昭和25年に十勝に移った。

戦後、大樹に13年いたことがある。そこで砂金をとっていた。また、鷓川と沙流（ニセウ、フレナイの上）でイリジウム（白金）を採っていた。

私の叔母が札幌の創成川近くの狸小路の旅館にいたことがある。

私は、10年ほど糠平で漁師をやったことがある。大きな流木があつたら、それに乗って川を下る。適当なところで網を仕掛ける。（私は網も編む）。とれた魚は旅館に売った。糠平湖には3mくらいのコイがいる。

東映映画『搜索』の撮影のさい山の案内をしたことがある。

ドイツ人が山で遭難したことがある。そのときの搜索の日当が1日800円だった。

昭和34年、弘前医大の学生が遭難したときは、1ヶ月間搜索した。

ウペペや石狩岳には遭難した人の搜索によく行った。

12月、姿のいいシカを見つけたので後をつけていった。シカは「高山（たかやま）」の方に登って行った。当時、気象庁が観測器のついた風船を放し、見つけた者に謝礼を払うということが行なわれていて、頭の上のほうにも注意していた。そのとき、下半身のない首吊り死体を発見した。仏がシカを利用して死体の在りかを知らせたと考えると気持ちが悪くなり、そのシカを追うのをやめにした。（夜の8時ごろ遺体収拾団がきた。北海道地図とまかないものはリュックサックのそばにたたんであり、スポーツ用の靴もちゃんと揃えてあった。）

春先（3月）、糠平湖のボート場の反対側、南向き斜面ぞいの湖水は氷がとけるのが早いので、マスがとれた。ある朝、マスとりに出かけたが、何の収穫もなく戻ろうとして道に出ると、氷の下に人間の頭が見えた。カケスカネズミが鼻を喰ったあとがあった。手を合せてからすぐに帰り、「とくなが」（漁用の長靴）だけ脱いで駐在所に行った。

糠平に高松宮御夫妻が泊ったことがある。私が作った十勝石の「黒サギ」（貼りつけ細工）に妃殿下が感心した。差し上げようと思ったが、戦後は民間人が直接皇室に献上することが許されなくなったので、できなかった。

[瀧瀬一雄氏]

6-4-7. トゥス（巫術）

まごばあさんの妹の旦那もヨシネさんの母親（名前はリツ）もトゥス *tusu* だ。他に神降ろしができる人は、谷口ヨシさんもそうで、あちこちに頼まれて歩いていた。

まごばあさんが亡くなる前に火を焚いてカムィノミ *kamuynomi*（お祈り）した。まごばあさんの妹の旦那のエカシ（芽室の本村宇平）は、雷の神がついている人だった。トゥス *tusu*（呪術）をする男の人をトゥス エカシ *tusu ekasi* という。主人の座る右座でトゥスをする。エカシが座っている左側の炉の隅にイナウ立て、火を焚いてトゥレブ *turep*（ウバユリ）、ベカム

ベ pekampe (菱の実)、お米などの食べ物をオカオ okao (あげる) してから始める。一緒についてきた妹ばあちゃんも私の母親も食べ物を火の神にオカオした。エカシは、イナウキケを首に巻いて、あくびをしてからウーウーと大きなうなり声をあげると体が急に引き締まって右手にキセルを持って床に刺した。悪いものにもう負けそうだとすると、イナウキケを今度は右手首にも巻いて始める。雷の神だから煙草は嫌いなので煙草を火にくべたりはしない。

まごばあさんの具合が悪くなってから私が芽室の本村のエカシの家まで行ってトウスを何回かしてもらった時に、まごばあさんが急に悪くなった原因をエカシが説明してくれた。まごばあさんの旦那であるエカシには妾がいた。そのエカシが妾の所で亡くなり、エカシはどういう訳か神様の所へ行ってしまった。まごばあさんは、自分が死ぬときには絶対に神様の所へは行かないで仏様の所へ行くとがんばっていた。生まれるときには神様に授けられて来たけれど死ぬときには仏様の所へ行くと行って聞かない。神様の所からエカシがフチの迎えに来る、仏の方からも昔に亡くなった本村の長男のシゲタロウが迎えがくる。迎え同士がぶつかってどっちにも行きもしないで患っているのだ。仏の道とは、先祖の所へ行くことだ。エカシは、パイェカエ カムイ payekae kamuy の所に行った。パイェカエカムイとは病気の神で、この神様が来たらウピシキ オカオ upisiki okao と言っていろいろな食べ物を6種類備えなければならぬという。たとえば、米、イナキビ、プクサ、トゥレブ、シシャモにもう一つ入れる。「(病気の神様だから) 家に寄らないで下さい」という。病気の神は、鳥になったり、ヘビになったりいろんな形になって来る。

なお、シケレベとベカンベは神様用なので仏様にあげるものではない。

そのトウスで聞いた話をまごばあさんには聞かせなかったが、つぎの日に起きて遺言して亡くなった。

私も体が弱かったのでエカシにカムイノミしてもらいアイヌの名前をつけてもらった。「物をちゃんと始末する女」という意味のモニカルマツ monikarmat という名だ。兄さんが亡くなったのが私が9歳の時だから、その後に名前をつけてもらった。名前をつけてもらってから私は丈夫になった。母親にアイヌレーヘ aynu rehe (アイヌの名前) がなくて、私にはあることになる。

エカシに雷の神がついているのは、雷は女の神様で、エカシと同じ時間に生まれたので、雷の女神と結婚しなければならない。ということは早死にしなければならないということだ。人間同士でも同じ時間に生まれた者同士は結婚しなければならないことになっているのだそうだ。結婚する年頃になるとこの世を去って神様と結婚しなければならないのに死ななかつた。エカシの奥さんがエカシの面倒をよく見たので早死にせずに男の子3人、女の子2人をもうけた。エカシは奥さんに守られたが、その子孫は男3人女2人が次々と死んだ。エカシが早くなくならなければならないのに奥さんが面倒を見たので、代わりに子どもが死んだのだ。子どもが亡くなってしまってから宇平エカシも死んだ。私の父親の弟が跡取りとして入った。後に入った叔父も12人の子どもをもうけたが、今は4～5人しか生きていない。

ヨシネリツさんにどんな神がついていたか知らない。よその家なのでよく解らない。

[上野サダ氏]

6-5-2. 出産

おば（母親の姉妹か、父親の姉妹か不明）は、私の母親がとりあげた。私が小さい頃の事なので余り覚えていないが、お産をする所を見た。タルを上からぶら下げて、それにぶら下がり、腰の下に藁を敷いてその上に毛布かなんか敷いてその上に布団を敷いて座るような格好で斜めになってお産した。

[上野サダ氏]

6-5-4. 命名

父親は、アイヌ語の名前がなかったようだ。母親にもアイヌ語の名前がなかった。母親はシレッコと呼ばれていたが、これはアイヌ語ではなくて、ヒデコとつけようとしたが役所に行き届けるときに発音が違ってしまって、シレッコとなってしまった。本名はシレッコなのにいつの間にかタケとなってしまった。留吉の父、私のまごじいさんは、アイヌ語と日本語で両方の名前を持っていた。アイヌ語名は、イヤノツ iyaynot という。まごばあさんは、テツという。アイヌ語の名前を持っていた。

まごばあさんは昭和18年、私が19歳の時に86歳で亡くなった。西帯広の墓に埋めた。母親が遺言されていてキナも着るものも預かっていたのでまごばあさんはアイヌブリで送った。その時に残ったタル tar（荷縄）を百年記念館に寄付した。

[上野サダ氏]

6-5-6. 葬礼

まごばあさんは昭和18年1月26日に亡くなった。亡くなる直前にサイダーをほしがったので芽室まで買いに行き3本買って来た。その頃は配給制ではあさんの好きな煙草も配給制だった。親戚から葉煙草を集めてもらって来てばあさんに飲ませた。

冬の間は目も不自由だったので母屋にいて甥子3人と朝から話をしていたが、昼から急変した。高橋のじじがおぶってフチの家に運んだ。それから拝む人を頼んで来たり、医者に来てもらったりした。老衰だからと言われた。

拝む人は、まごばあさんの妹（名前はトマ）の連合い（芽室生まれの本村宇平）で、イナウをこしらえてキケ kike（削り欠け）を自分の首に巻いてお祈りした。3日目にヨシネさんのハポ hapo（育ての親）と二人でお祈りしてもらったがつぎの朝に死んだ。

私の親戚は、芽室や幕別に多いので不幸があると葬式行ったので、葬式のことはよく知っている。病人や年寄りや死にそうな人は、いつも主人の座る所、ヌサの窓に向かって炉の左側（右座）に壁際に寝かせる。炉の右側（左座）は、エウサルン eusarun と呼ぶ。ヌサの窓の方の上座は、ロット rotta とかオロルン ororun という。どういう人か知らないがキナを着せられてエウサルンの方、北側に寝かせられている人も見たことがある。隣の田辺の家で見た。子供の頃だからどういう人だったか覚えていない。

よその人でも自分の家の人でも川流れなどで死んだ人は家に入れぬ。外に家を建ててそこに入れるものだ。

まごばあさんは、3日間わずらってトウス tusu (拝む人、巫者) に見てもらったりしたが、朝の9時頃亡くなった。ばあさんは、アットウシ attus (厚司)、ホシ hos (脚半)、テクムベ tekumpe (手甲)、ケル ker (キナで作った足袋)、ケトウシ ketus (小物入れ) などを自分で用意しておいた。服には皆はさみを入れた。鍋でもなんでも一部を欠いておく。服を着せるのは家の女の人だ。顔には布をかぶせていた。ニンカリ ninkari (耳輪) は家に置いてあったので、つけてなかった。死の旅に出るための杖 クワ kuwa も作って墓に収める。仏様の枕元に生前愛用の煙草を詰めたキセル (ニーキセリ ni kiseri) をお膳に置いてフチと並べて置いてあった。

死装束を着せて、キナで巻いて、紐を木に通してキナを縫うようにして閉じた。その上からタル tar (荷縄) を通して担いで墓地に運ぶ。

亡くなるとすぐにライチシカラ rayciskar (死んだときの泣き声) する。弔問客が来る度に泣く。泣くのは女の年寄りの人だけだ。弔問客は、土間で中腰で片膝立ちでライメク raymek して履物を脱いで上がって来る。家族の者は弔問客が来る度に泣かなければならない。子供はしなかった。まごばあさんの妹が中心になりライチシカルした。客が入って来るとライチシカルし、客も泣きながら仏の頭の方に行き大きな声でライチシカルする。

男の人は、カムイフチ kamuy huci (火の神) にオンカミ onkami (礼拝する) する。身内のエカシは、右座でよそのエカシは左座の方で火の神にオンカミする。フチの男兄弟も弔問にきた。

料理は、弔問客の来る前から母屋でこしらえて用意して置きフチの家を持って行った。ライチシカルして終わったら、カムイノミして仏様に向かって「間違わないでこういう所へ行きなさいよ」という。カムイフチに頼んで先祖に来てもらって仏様の事を頼む。

墓標も白い花が咲くプンカウ punkaw で作った。仏様が出るとすぐにフチの弟が墓標を作り出す。墓標になる木は家の近くにあった。家の外の東側で作る。墓標は一人担ぐ。死体を担ぐ木は何の木か知らない。葬式にイナウは必要ないのではないか。

ロルンプヤル rorunpuyar (神窓) は、葬式の間は締め切って置く。葬儀は、ヌサは小さい関係しない。

亡くなってから2晩おいて墓地に持って行った。親戚など音更や芽室、上土幌から弔問客がみんな来るまでにそれくらいの時間が必要だった。仏様を家から出すときにはアパ apa (玄関) から出さずに他の場所から出した。壁を破って出したのかも知れない。若いものがみんなで面倒くさいことするなと話し合っていたのを覚えている。寝ていた所の南側の横の壁を破いたのかどうかははっきり覚えていないが、玄関からは出さなかった。

亡くなった人はキナでくるんで運ぶ。大きな鍋までも背負って行った覚えがある。

小さな家を建ててその中でカムイノミして燃やして家を送った。

墓標（クワ）kuwa は、股になっているのは、たぶん女で、丸っぽが男だと思う。墓標は、倒れても立て直したらだめだとばあさんが言っていた。

仏様を運ぶ人は男で、2人で担ぐ。列を作って鍋などを背負って西帯広の墓地まで行った。冬でしばれているから穴を掘る人が仏様の行列よりも先に行っていた。

墓の中にキナを敷いて、死体を下ろすとキナを折ってかぶせ、その上から土をかぶせる。死体を落とすときは2ヶ所同時にタルを一気に切って落とす。仏様の頭は、北東に向く。途中までいけた所で墓標を立てて土で埋める。墓標は仏様の頭の方に立てる。墓標は10cmくらいの太さで、地面の中には3尺くらい入り、地面から上に3尺くらい出ている。墓標にイトクパ itokpa（祖印）などつけるのは知らない。頭に白と黒の布切れがついている。

墓地からの帰り道で枯れたヨモギでフスサフスサ hussa hussa と言いながらお払いする。先祖の所へ帰れなかった無縁仏がついてこないよという意味だ。仏に末練を残さないために振り向かずまっすぐに前を向いて家に帰らなければならないという。

家に帰ると火の神にもう一度ライチシカラ rayciskar してオカオ okao して食べ物を火の神に渡し、葬式が終わりましたと報告する。男の年寄りがイノンノイタク inonnoitak（お祈り）して先祖を呼び出し、「フチが行ったから迎えに来てくれ」とお願いする。死ぬ前に迎えに来てくれていた本村の長男のシゲタロウではなく、まごばあさんの母親に迎えに来てくれとお願いしていたようだ。あの世ではフチの父も母も夫婦だから一緒に住んでいる。女があのに家を持って行けば、夫婦がその家に一緒に住むという。

年寄りなどは、フチの家にもう一泊して帰る。母屋からおつゆを運んでフチの家のスニ suni（鍋かけ）にかけて温める。亡くなった時にトゥイタク tuytak やユーカラ yukar はしない。ウポポ upopo（踊り）もしない。

本来は、仏様の住んでいた家を焼くべきだったが、フチの家は本葺きの屋根で大きな家だったから火事になるとたいへんなので焼くこともできなかった。その代わりに屋根を降ろしてほぐして四隅の柱をフチの弟がナタでたたいた。傷をつけようがつかまいが、ただの一回だけたたいた。何回もたたいてはいけない。そうして家を持たせた。カヤなどは後で燃やした。

男の人はあの世に行くときに家がいらなくても、女の人はあの世に行くのにもカマドがないと困るので家を持たせるために住んでいた家を燃やして送るのが決まりだった。

母親が亡くなった時には、大正のじじ（山川力）がカムィノミし4人が入れるくらいの小さな家を建てて燃やして送った。母親が死んだら使うようにと他の家の人がキナをくれたので、お棺に入れた。2日間仮家に置いて次の日に家を送る。

家を送ることをカス オマンデ kas omante という。カソマンデとは発音しない。

子供は、亡くなると先祖の所へ行くようにとカムィノミして送るので、家を送ることはしない。

一週間の間、毎日フチの家の炉でフチが無事にあの世に行けるようにと火を焚いてオカオしていた。だから、カス オマンデは一週間後だ。

1週間か10日たった後にフチの使っていたいろいろな物を始末する。これをカムイウタル オブンバレ kamuy utar opunpare という。たとえば、フチが生前使っていた炉のカムイフチ（火の神）をヌサの方へ持って行って始末する。本村のエカシが始末した。山川のじじはまだ若かったので走り回って手伝っていた。

フチの火の神は、フチが長年使っていたので年寄りの神で、母屋の家の炉の神は若い人が使っているから若い火の神だ。フチのカムイはオンネ カムイ onne kamuy（年寄りの火の神）だから、カムイ オブンバレ kamuy opunpare してから家をほぐして送らなければならない。母親の時には、葬式の終わったあくる日に家を立てて送った。年寄りの女の火の神に向かって、もう送りましたから、若い火の神の方に来て若い人達を見守ってくれるようにとお願いする。どういう訳か知らないが、フチの家にはヌサは立っていなかった。母屋の方にだけヌサがあった。男がいなかったので本村のエカシが来て、そのエカシがなくなってからは大正のじじが来て、ヌサのカムイノミを母屋でやっていた。母屋でやったあとでパッチ patci に酒を入れて持って行って火の神にカムイノミしていた。

[上野サダ氏]